

森と溪流から「ムラの成り立ちの物語」を考える

山形県北部の農山漁村もようやく新緑の美しい季節を迎えた。筆者がもっとも好きな季節である。

以前もこの紙面でふれたが、筆者は今、山形県の内陸から海岸部までをつなぎ、各地の地域資源と知恵や技術を活用して農山漁村を元気にしていこうというプロジェクトに取り組んでいる。だから年度初めのこの時期は内陸から海岸部、離島まで飛び回って打ち合わせやら現地の下見やらに奔走することになる。様々な事務作業を抱えながらあちこち動き回るのは苦勞も多いのだが、しかし筆者にはそれなりに楽しみもある。それは一年のうち最も生命力にあふれた各地域集落の美しい里山と清流の自然にじかに触れることができるということだ。

筆者は、溪流釣りが大好きで、今年も各地を訪問する傍ら、時間があると集落上流の森に入って溪流釣りをすることを日課としている。そしてどの地域集落に入ってもそのすごさに魅了される。それぞれの地域の暮らしの多様さと奥深さ、住む人々の地に根ざした語り口調の面白さ、人と自然が織りなし合いながら形成してきた環境の豊かさなどが、各地域の魅力を厳かに形成しているからなのだろう。このことは各地域集落の山や溪流に分け入ってみるとよくわかるものなのである。

美しい森を流れる溪流で、野生動物の気配を感じながら歩いていると、そもそも原生自然から人が住めるような集落を形成するということが、一体どういうことなのだろうということを感じるようになる。ムラ（地域集落）を形成する際に最も重要なことは、暮らしに使える水をいかに確保するかということであろう。そしてその水を作り出す役割が山（森）であった。だから、先人が暮らし方を定めその地に住むことを決めるにあたって考慮したであろう様々な基本的条件ともいべきものが、集落の裏山や溪流に分け入ると自然と見えてくるのである。そこには、その地で暮らしていくことの理由や意味、生き方の原型というべきものが内包されているのである。例えば川の水量は田んぼの枚数を決め、村の世帯数を定めるであろうし、森の樹種は燃料としての利用が可能なのか、山菜やキノコの育成が可能なのかによって、食文化や冬の暮らし方に影響するだろう。さらに水質も金気（鉄分）があるかどうかによって、家の周りの有用植物として何を植えたらよいか、栗なのか柿なのかということに影響を与えるだろう。場合によっては、元来からその集落のみで世帯数を養うという自給自足の設計ではなく、峠を越えた他の集落と連携することで物々交換し暮らしが成り立つというような交易地域圏を構成していたと思われる集落もある。いやむしろ、元来日本のムラは「風土」という言葉に代表されるように、ヨソとの交流（風）と地域での育み（土）が合わさり形成されてきたと考えるならば、こちらのほうが一般的なのかもしれない。

いずれにせよ、その地域集落がなぜそこにあるのか、なぜそこで暮らそうと決めたのかという「ムラの成り立ちの物語」をきちんと調べ探っていくことが、これからの地域づく

り、特に農山漁村の地域づくりを考える際には大切なことだと思う。自然環境の悪化や経済状況の厳しさ、過疎化少子化による社会変化の影響から、農山漁村の低迷が叫ばれて久しい。しかし、こうした外的な要因からくる問題解決型の農山漁村づくりを志向するだけでは限界がある。地域に住む古老の知恵や技術、そのまなざしをきちんと調べ、各々のムラ内部の声に耳を傾けていく努力が必要だ。それは決して古くて役に立たないものではなく、これからの特に農産漁業を考えていく際の普遍的な哲学を含みこんだものだろう。初夏、集落の森の静かな溪流で釣りをしながら、そんなことを考えている。